The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「文系」「理系」
Author(s)	糸魚川, 直祐
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1995, 97, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66107
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言

「文系」「理系」

大阪大学人間科学部教授　糸魚川直祐

「文系」か「理系」かという区別は、いつ頃から日本人の意識の中に入り込んできたのか。世界の歴史と現況をみれば自明のごとく、わが国にも人を区別するさまざまな範疇があり、われわれはその呪縛から逃れずにいる。

勉強の科目に得意、不得意があることは、皆いやというほど知っている。学校教育のことだけを考えてみても、科目にはそれぞれ複雑な特性があり、各人はその特性に応じて得意であったり、不得意であったりする。科目そのものの特性によるのみならず、だれがその科目をどのように教えるかが、得意、不得意を生む原因のひとつである。○○科目の先生が嫌いだから、○○科目が不得意になったという経験を持たない人はむしろ少ない。

勉強に限らず、あらゆる人間のいとなみは、あれか、これか、という単純な分類によっては区別できない。人はこのことをよくわかっていながら、区別をあえてし、また、それに縛られて身動きができない。人のこのような「分類癖」は、言語を使用する高度な概念操作と思惟行為といえるが、筆者が観察しているサルの立場からすると、人間の愚かな自縄自縛行為にすぎない。

「文系」、「理系」という人間の愚かな峻別意識から逃れるには、どうしたらよいのか。そのひとつは、道具を使って計算することではないかと筆者は考えている。算盤に始まり、計算尺、手動計算機、電動計算機、電卓、コンピュータに至る筆者自身の稚拙な計算遍歴を回顧すると、道具を使っての計算には、多くの人を誘う不思議な共通の魅力がたしかにある。

この魅力を知る人は、「文系」、「理系」という区別がむなしいことを実感している。計算機センターの活動は、われわれの仕事としての業務に役立っているのみならず、われわれの意識改革にも貢献していると言える。